橘千蔭の序文草稿二種

――内藤記念くすり博物館所蔵資料――

神谷勝広

はじめに

橘千蔭は、江戸期の国学者・歌人として著名である。享保二十年（一七三五）に生まれ、文化五年（一八〇八）に他界する。通称、要女・又左衛門。字は、常世麿、号は、芳宜園・荘園。

父親の枝直は、江戸町奉行与力で大岡越前守忠相等の配下として勤務した人物であるが、風流を解した文化人でもあった。その父の影響もあってであろうが、千蔭は、少年時代から賀茂真淵に入門する。宝暦十三年（一七六三）に父の跡を継ぎ与力となり、天明八年（一七八八）五十四歳の時に病気を理由に致仕した。ところが、翌年、寛政の改革により在職中の勤務について責められ閉門を命ぜられる。

退隠後、『万葉集略解』を著作する。歌人としても、家集『うけらが花』を残す。また、書では、千蔭流の祖として高い評価を受ける。

さて、内藤記念くすり博物館には、図1のような一つの袋が所蔵されている。袋の大きさは、縦約四十糎・横約三十糎である。その表紙には、朱で「必用保存品」、墨で「橘千蔭大人稿本切□（続か）」と書かれている。この袋の中に、三十五枚の紙片が入っている。その内容は、大まかに分類してみれば、次のようになる。

1　千蔭筆序文草稿二種二枚
2　千蔭筆和歌草稿十一種十二枚
3　千蔭筆和文草稿七種八枚
4　千蔭筆書簡草稿五種五枚
5　千蔭筆その他草稿二種二枚
6　千蔭宛書簡五通五枚

7　発信者宛先とも未詳書簡一種一枚

8　無関係書簡一種一枚

同じ紙片の表に千蔭宛書簡、裏に千蔭筆和歌草稿が書かれているものがあるで、同じ紙片を二度数えている。

今回は、右のうちの1について具体的に述べ、資料的に確実なものであることを示す。2から6については、別稿を用意したいと考えている。

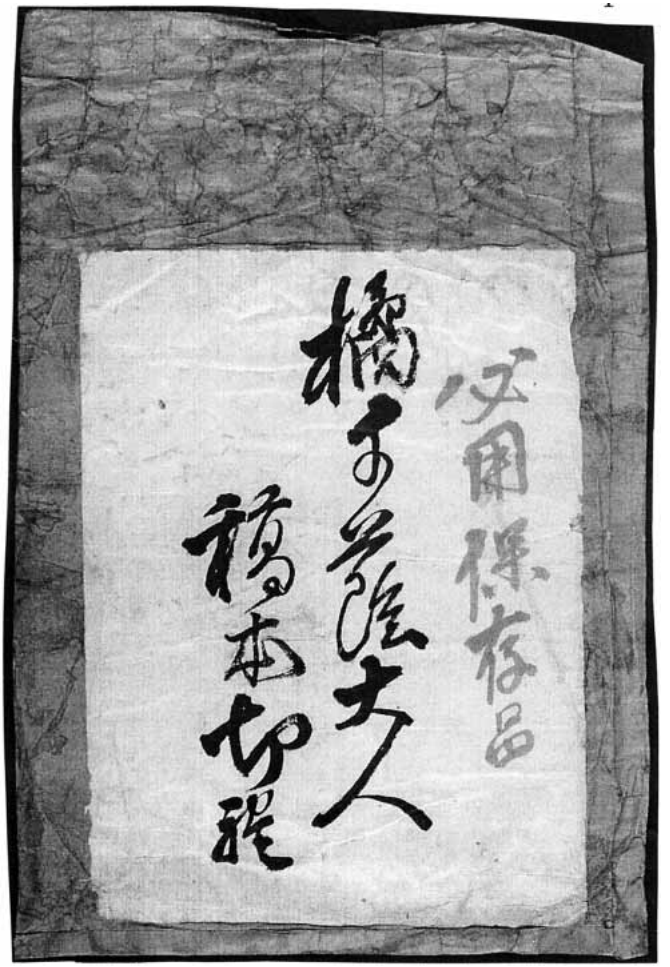

図1

一　『賀茂翁家集』序文草稿

千蔭の師であった賀茂真淵は、元禄十年（一六九七）に生まれ、明和六年（一七六九）に没している。もともとは、遠江国敷智郡浜松庄岡部郷、賀茂神社神官の裔で農をも業とする郷士であった。伏見の荷田春満から国学を学び、後に、浜松に妻子を残し、単身江戸に出て、五十歳から六十四歳まで八代将軍徳川吉宗の第二子田安宗武に和学御用として仕える。優秀な弟子を輩出し、一時代を築いた。江戸時代の国学者・歌人として重要な人物である。

真淵の優秀な弟子の中に、村田春海がいる。春海（延享三年〔一七四六〕～文化八年〔一八一一〕）は、干鰯問屋を営む豪商の家に生まれた。父の春道・兄の春郷と一緒に真淵に幼くして入門する。次第に頭角をあらわし、千蔭とも並び称されるほどになる。

春海は、『賀茂翁家集』を企画し、文化三年（一八〇六）に出版するが、その序文を千蔭に頼んでいる。

図2にあげる紙片は、その際の草稿の最終部分に当たると思われる。紙片は、縦約二十糎・横約二十糎の大きさで、裏打ちされ補強してある。紙片を翻刻すれば、以下のようになる。

十巻とはなしぬうしの遠つおやよりして現身の世にませし
ほとの事は江戸の南荏原の郡品川の東海寺なる少林院
又しるすへきあらましもみえたる
のおくつきのかたはらの石ふみにしるすへけれはこゝにははふ
したれは
けり
まぬ真淵といへるみ名は敷智の郡の名よりおもひよりて
つき給へりとそあかたゐとは庭を田ゐのさまに作りて
かも氏のかはねにもよしあれはとてみつから家の名に
おほせられたる也けり〔破損〕今よりをち古への学〔破損〕
世にひろこりなはいよゝこのうしをたふとみかつ
きみかつ此書をたゝへ
此書をたゝへなんものそとて其ことわりを
のふるになん有ける

享和元年十月廿日　　橘千蔭

ここの部分は、真淵がなぜ県居と号したかを説明しており重要である。筆跡自体、相当に乱れているが、他の千蔭自筆類と比較し、特に違和感はない。

では、刊行された『賀茂翁家集』の千蔭序文の末尾部分を次に示す。

十巻とはなしぬうしの遠つおやよりして
現身の世にませしほとの事は江戸のみなみ
荏原の郡品川の東海寺なる少林院の奥
つきのかたはらの石ふみにしるしたれはこゝに

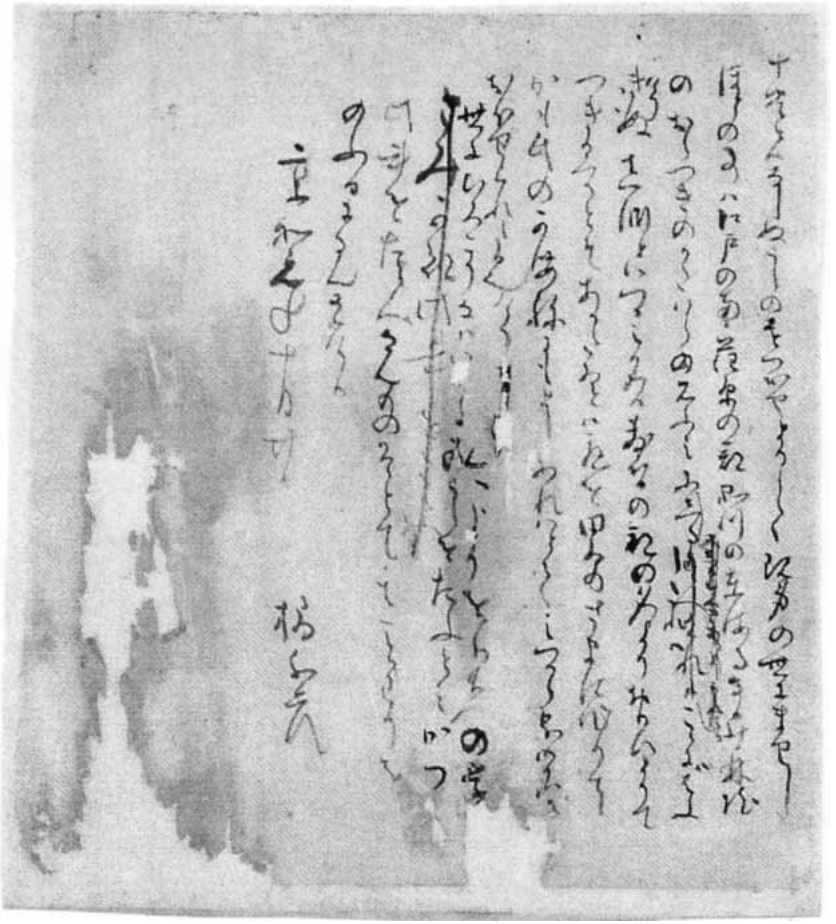

図2

ははふけり真淵といへるみ名は敷智の郡の
名より思ひよりてつきたまへりとそあかたゐとは
庭を田ゐのさまに作りて賀茂氏のかはね
にもよしあれはとてみつから家の名におほせら
れたる也けり今よりをち古への学ひ世にひろ
こりなはいよゝ此うしをたふとみかつこの
書をたゝへなむものそとて其ことわりを
のふるになむありける

享和元年十月廿日　橘千蔭

先にあげた紙片と右の序文は、基本的に、内容だけでなく細かい表現まで合致しているので、紙片は完成間際の草稿と推定できる。

さて、紙片で訂正を加えられたところが三箇所ある。具体的には、

① 「石ふみにしるすへけれは」を、いったん「石ふみに又しるすへきあらましもみえたるへけれは」に訂正しようとしたが、さらに「石ふみにしるしたれは」と直している。

② 「はふきぬ」を「はふけり」と訂正している。

③ 「たふとみかつさみかつ此書をたゝへ」を「たふとみかつ此書をたゝへ」と訂正している。

であるが、確かに刊本の序文でも手直しされている。①②は単純な訂正だが、③は興味深い。

紙片では「たふとみかつさみかつ」とあり、褒められたり貶されたりという言い方だったが、「さみ」（貶す）を消し、褒めるだけに訂正したことがうかがえる。確かに、亡き師匠の業績を讃える書籍の序文に、「さみ」という文言は相応しくないだろう。しかし、千蔭は、序文執筆中、意識のどこかに、いまだ真淵の世間的評価が定まっておらず毀誉褒貶半ばする危うさを感じていたのではないか。その痕跡が、完成間際の草稿にまで残っていたと考える。

二　『月詣和歌集』序文草稿

江戸派中期の国学者は、ほとんど橘千蔭と村田春海の門下から輩出する。千蔭門には大石千引・岡田真澄などが出、春海の門下には岸本由豆流・小山田与清・清水浜臣などが出ている。

春海門の清水浜臣は、安永五年（一七七六）に生まれ、文政七年（一八二四）没する人だが、医を業とし、江戸下谷不忍池畔に住んでいたので泊泊舎と号し、古典の考証注釈のほか、国語学にもすぐれ、文才も豊かであった。当代に名声が高く、彼のところにも多くの門下生が集まった。

その浜臣が、『月詣和歌集』の出版を企画する。『月詣和歌集』は、賀茂重保が撰者となり、寿永元年（一一八二）に成立した私撰和歌集で、十二巻の編成である。一二〇〇首を十二巻に分けて収めるが、

図3

現存諸本はいずれも巻八全巻と巻十一後半を欠いている。したがって、浜臣の編集作業も困難であったと思われる。諸本間の移動や不明確な語句も少なくなかったはずである。刊行された『月詣和歌集』を見ても、欠字部分があったりするので、編集の労苦がしのばれる。

浜臣は、『月詣和歌集』の刊行に際し、序文を千蔭に書いてもらっているが、図3として提示する紙片は、その草稿と見なすことができるのではないだろうか。紙片は、縦約二十糎・横約三十糎の大きさで、これも裏打ちの補強がなされている。紙片の翻刻を行えば次のようになる。

月詣集は其えらへるやうめつらかにてことに
すくれたる歌すくなからすして世にもてはやす
へきふみに有とうつしあやまりあるは書もらし
たるなとのみよにて、はあるかあかぬ事になん
有けるさるをさ、なみのやのあるしこ、かしこより
あまた
もとめ出てあまたのなかよりかふ□□□かしかへ
□□□
てかつときかたき□□あるは同したくひの歌をも
はちうさくをくはへ
引出てかくのものしつる也歌□はよみ□ぬしの

□心□し□け　　此文えらへるぬしの□たに
こゝかしこ　　わさにさへ年かと
ためいとしきわさならすやか□
こ□□取□□くるしければいはひけるみの
世にひろまれるは此文えらへるぬしのためいとしき
にもよか
わさにあらすや
□このめる人のためよろこはしきわさに
あらすやかれ其書にとちめにいさゝか計しるしつ

筆跡はかなり乱れているが、千蔭のものと見ておかしくないと思う。ただ残念ながら、細字で、なおかつ多くの訂正個所があり、どこがどこへ繋がるのかさえ不明瞭な状態になっている。ここで、文化五年（一八〇八）に刊行された『月詣和歌集』の千蔭序文を見てみよう。

月詣集は世くたれりといへとも
うたのさまみやひにうるはしくて
ふかくめてたふとむへき書にし
あれはいへ〳〵にうつしものせれと
いとあやまれることおほくてあかぬ
ことなりしをさゝなみのやのあるし
としころこのふみにつとめてあまた
見くらへたゝして円珠庵の大とこの
もろ〳〵のふみおかうかへたゝしたる
あとにならひてつはらにかしら書を
くはへえらへる人の家のつたへうた
人のかうかへなとをそへて相談て
四まきとしてこたみいたにゑりぬ
かくてこのふみ千とせのゝちまてつ
たはれらむはこのふみつくれる人
のためにもいほとせあまりのむかし
の歌人たちのみためにもいとしき
わさにしてはた見むひとのいたつき
なきもよろこはしきことにはあら
すやかれいさゝかふみのすゑに
しるせり

文化五年閏六月　　橘千蔭

紙片も刊本序文も「月詣和歌集は」云々で共に始まること、また大まかな内容（多くの写本を集めて校訂を行ったことなどを述べた部分など）は近似している。これらの点から、紙片が草稿であることに問題なかろう。

しかし、紙片には多くの書き直しがある。加えて、刊本序文とは

細かい文辞でかなりの相違が存在する。特に刊本序文にある「円珠庵の大とこの」云々という契沖に言及する部分が紙片にはない。したがって、紙片は草稿として極めて早い時期のもの、つまり初案ではなかったろうか。この後、かなりの推敲を経て、完成原稿の形に整えられ、刊本序文になったと推測する。

三　他の資料について

右に示した二つの紙片は、その状況からして、千蔭の自筆草稿と見なすべきと思う。いかがであろうか。

さて、今後、順次紹介していく予定にしている、

2　千蔭筆和歌反古紙十一種十二枚
3　千蔭筆和文反古紙七種八枚
4　千蔭筆書簡反古紙五種五枚
5　千蔭筆その他反古紙二種二枚
6　千蔭宛書簡五通五枚

について手短に概要を述べておく。

2は、千蔭の歌集『うけらが花』に見出せない和歌や、近似した和歌があっても異同あるいは訂正が存在するものを含んでいる。3は、『うけらが花』巻七収録の「寛政七年四月三日二荒の宮の御前の舞楽を見侍りし時宮のおもと人岸本土佐貞主のもとめによりて書きておくるふみ」と前書きのある和文の草稿や、隅田川で涼みをした際の和文の草稿、加藤宇万伎が大坂へ行く際に送った和文の草稿など。4は、千蔭が小沢廬庵に初めて送った手紙の草稿、「とさはの君」宛の手紙の草稿など。5は、まったくの殴り書きのようなものが二種。6は、千蔭の自筆草稿ではなく、千蔭宛書簡である。差出人は「いくめ」「光国」「信悦」「清珠尼」および不明一名。

今回および今後予定している拙稿が、千蔭研究の基礎を固める一助になればと願う。

注

①『賀茂翁家集』は、大阪府立中之島図書館蔵本による。
②『月詣和歌集』は、大阪府立中之島図書館蔵本による。

〔付記〕資料の掲載を許可いただいた内藤記念くすり博物館に対し、深謝申し上げます。